

1 7 28
 幼児の教育
 110年の散策

56 109 110

「笑う」「笑い」「ユーモア」

— 第四十巻第四号（一九四〇年四月）、
 第四十六巻第九号（一九四七年十一月）より —

子どもが、気の良さや楽しさ、人間らしさを発揮するには、笑い合えるつながり、ユーモアのある雰囲気が必要に思う。硬くまじめくさった、今にも注意されたり怒られたりするかもしれないような、油断ならぬ環境においてよりも、間違いや失敗も許されるような温かく楽しい環境の中でこそ、人は他者や自己への不信感を募らすことなく、人も自分もまんだらではないと思ひ、人間らしくいられるのではないかと。

そんな思いから、「笑う・笑い」あるいは「ユーモア」について触れられた記事を二つ紹介してみた。一つ目は、今から七十三年も前に書かれた会話風の記事で、時と所は「四月の半頃より末頃まで」「日本国中とどこどころ」とある。全四話あるうちの四話目（第四景）。A母、B保母の、漫才のような会話で、著者は、当世母親氣質を困ったものだと嘆息し、あきれてもいるのだろうが、同時に、このような事態を面白おかしく感じている。感じるからこそ、その面白みを伝えずにはおれないのではないか。そしてもう一篇は、倉橋惣三による「幼児教育者とユーモア」という一九四七年の一文である。

（本誌編集委員 菊地知子）

四月といふ月は泣いたり笑ったり怒ったり (一九四〇(昭和十五年)年 第四十卷第四号)

留岡よし子 (十文字高女附属幼稚園)

A 1 先生、お弁当は何時からでございますか

B 〇日からでございます。あの昨日差上げました刷物に書いてございますが

A 2 先生お弁当は何に入れてまいったらよろしうございませうか

B 本年はバスケットでもランドセルでも袋でも何でもよろしいのでございます。あの昨日差上げました刷物に書いてございますが

A 3 先生お湯呑はどんなのがよろしいのでございませうか

B なるべく落しても割れません様に、アルマイトのでもアルミニウムのも……そしてお名前をつけて頂きたいのでございます。あの昨日差上げました刷物に書いてございますが

A 4 先生お盆はどんなのがよろしうございませうか

B 重ねますから丸いのを所持たせ願いたいと存じます。あの昨日差上げました刷物に書いてございますが……

A 5 先生、お弁当箱はどんなのがよろしうございませう

B 何でもよろしいのでございますが冬になりますと暖めますので新しくお求めになるのでしたらアルミかアルマイトの様な塗物でないのがよろしいのでございます。あの昨日差上げました刷物に詳しく書いてございますが

A 6 先生歯ブラシは何がよろしいのでございませう

B きめては居りませんが消毒致しますし懸けて置くのに都合のよい様に柄がセルロイドでなく穴の開いている角の方がよいと思います。あの昨日差上げました刷物に詳しく書いてござい
ますか
………

独白

B あ、お母さんは小学校を出ているんじゃないのかしら…… (おわり)

幼児教育者とユーモア (一九四七(昭和二十二)年 第四十六卷第九号)

倉橋惣三

やさしさといい、ゆきとどくことといい、殊に、まじめさにおいて、申し分のないといわれる先生で、おしいかな一点足りないと思わせられることがある。ユーモアのない人である。

ユーモアと、イギリスの言葉のままを持ち出すのとも思われるが、どうもぴったりにい
いあらわし方がむつかしい。滑稽、諧謔と書いては、字がかたいばかりか色が濃すぎる。おどけ、
ふざけといえ、わざとらしさが感じられ、ひょうきん、とぼけなどという、性分の傾向の
ように響く。もっと淡く、どこまでも自然に、性分というよりは気分といった方がいい気の軽
さである。

こういう軽い気分といったことは、人格とか、教育者としての本質とかに、かれこれ取り上
げられる程のことではないかもしれない。しかし、教育者殊にも幼児の教育者は、先生である

と共に幼児のともだちであるという点からは、幼児の世界の一つの主な特質であるユーモラスな点にも、一味相通ずるところがほしい。その全く欠けている先生は、幼児にとって、有り難い先生であつても、うれしい先生でなく、たよりになる先生ではあつても、打ちとけられる先生ではないかもしれない。(中略)

しかし、そんな、わざとすることではなく、その人の気分の軽やかさから、ふと出るユーモラスな口調なり動作なりが、子どもを喜ばせ、少くも、子どもの心をらくにさせることは、幼児の友だちになれる一つの資格である。万事がきちりきちょうめんで、常住かみしもをつけたような態度だけでは、根がユーモラスな幼児が近づき難いこともないでなからう。

その日の健康加減などで、重くろしい気分、何か特別の事情でもあつて、むすばれた気分、それは、誰にでもあり勝ちなことである。おとな同志では、無理もないと思ひ、同情もされるのであるが、幼児の傍にいるものとしては、それも好ましくない。(中略)

幼児の心をひきよせなくつたつて、親切をつくし、人格的感化を与えさせなければいと、ひきしまった口で、その人はいつでもあろう。なすませたりなんかしては、人の師たる威厳をそこなうと、あお白い顔で、その人は思うでもある。が、それでは、子どもを愛し、教えることは出来るとしても、子どもと一つにはなれない。一つに溶けあわなくては、眞の教育も出来ないであらうし、愛するといつても、一方的に終らないと限らない。

子どもと一つになれるためには、先生の方に、子どももの心と相通ずるところがなくてはならない。たいらにいえば、どこかに、子どもらしいところがなくてはならない。勿論、どこかにある。すっかり子どもと同じというのではない。先生は先生であるが、一脈、子どもに似た

点をもち、子どもらしい面もあらねばならないのである。子どもらしいというのがお氣にいらぬならば、子どもに似るといってもいい。それがいよいよ失礼に聞えるなら、童心といっている。童心というと、大層神聖なものに解されることもある。(中略)しかし、そういう高い考え方は暫く別として、子どもの心にあるがままに感ぜられるものは、その気軽さである。(中略)少くも、なんでもが動きかけて呉れるのを待ち、笑いかけて呉れるのを待っている。余りに均勢のとれ過ぎた静、しかつめらしい整は、究屈である。氣づまりでさえある。静の中にも一味の動、整の中にもふとしたくずれの気軽さ。―その気軽さこそ童心であり、ユーモリスト幼児の心である。従って、その気軽さ、そのユーモアを全く欠いては、幼児の心と一つになれない。(中略)おとなは、そのかたくななのを厳肅と呼び、そのぎこちなさを厳格と称えて、教育の規としたりするが、教育そのものは嚴なるものであるとしても、その教育で心が一ぱいになりきって、すきも余裕も残り保たれないのは、われらの心の狭さからであり小ささからである。ユーモアの名において、ふざけよ、おどけよ、じょうだんをいえというのではない。ただ、心にいつもゆとりを有していたいと思うのである。このゆとりの中に、子どもらの無邪氣ないたずらも許されるであらうし、軽いからかいで子どもを喜ばすことも出来るであらうし、子どもといっしょに、うっとりしていることも出来るであらうし、子どもと共に心から興ずることも出来るであらう。こんなことは、教育として格別たいしたことでもないかも知れない。しかし、子どもには、それが、どんなにうれいことであらう。先生は、えらい人であると共に、ありがたい人であると共に、どこか自分達に似たところのある人だと思ふであらう。わたしの先生だとも感じるであらう。(後略)